

氏名(本籍)	山口智子(大阪府)
学位の種類	修士(看護学)
学位記番号	修士第88号
学位授与年月日	平成19年3月26日
学位論文題目	幼児後期の子どもにおける内服のプリパレーション モデル試案の構築

論 文 内 容 要 旨

※整理番号	90	(ふりがな) 氏 名	やまぐち ともこ 山口 智子
修士論文題目	幼児後期の子どもにおける内服のプリパレーションモデル試案の構築		
<p>1. 研究の目的 本研究の目的は、幼児後期の子どもにおける内服のプリパレーションモデルを構築することである。</p> <p>2. 研究方法 デルファイ法を用いた。幼児後期の子どもに何らかのプリパレーションを行ったことがあり、かつ内服薬を服用させたことがある看護師 139 名を対象とした。研究対象者に対し、幼児後期の子どもにおける内服のプリパレーションに必要な要素に関する調査を実施した。</p> <p>2. 結果および考察 第 1 回目調査は、英語文献 10 件、日本語文献 68 件の合計 79 件の文献から内服のプリパレーションに必要な初期要素項目 63 項目を抽出し、プリパレーションの 4 つの段階に分類した。第 1 段階は 17 項目、第 2 段階は 25 項目、第 3 段階は 12 項目、第 4 段階は 9 項目であった。</p> <p>第 2 回目調査は、第 1 回目調査で抽出された 63 項目について、研究対象者に「非常に必要」から「全く必要ない」の 5 段階で必要性の評価を求め、「非常に必要」、「必要」をあわせて 80% 以上の項目を同意を得たとみなした。その結果、同意率 80% を超えた項目は、第 1 段階は 17 項目中 16 項目、第 2 段階は 25 項目中 14 項目、第 3 段階は 12 項目中 10 項目であった。また、自由記載にて質問紙以外の項目で必要な項目を求め、4 項目を追加した。第 1 段階は 19 項目、第 2 段階は 25 項目、第 3 段階は 14 項目、第 4 段階は 9 項目の計 67 項目であった。</p> <p>第 3 回目調査は、第 2 回目調査の結果をグラフに示し、対象者にフィードバックした。内服のプリパレーションに必要な項目 67 項目に対し、第 2 回目調査の結果を踏まえた上での必要性の評価を求めた。第 3 回目調査で同意率 80% をこえたのは、第 1 段階では 19 項目すべて、第 2 段階では 25 項目中 18 項目、第 3 段階では、14 項目中 12 項目、第 4 段階では、9 項目中 7 項目であった。</p> <p>第 4 回目調査も第 3 回目調査同様に、項目の必要性の評価を求め、同意率 80% を超えたのは第 1 段階は、19 項目中 17 項目、第 2 段階は 25 項目中 17 項目、第 3 段階は 14 項目中 12 項目、第 4 段階は 9 項目中 7 項目であった。第 4 回目調査結果を最終的なコンセンサスとし、内服のプリパレーションモデルを作成した。第 1 段階で同意率が高かった項目は、子どもの普段の様子や発達段階、子どもの興味関心、子どもの思いや知識、親からみた子どもの様子に関してや親の思いに関するものであった。第 2 段階では、家族の参加が特徴的であり、内服は、家庭でも行われる治療であり、家庭でも引き続き、親が子どもの頑張りを引き出せるように、内服のプリパレーションは親とともに行うことが必要であると捉えていた。第 3 段階では、子どもの要望にできるだけ応え、子どもの覚悟を待ち、頑張りを引き出すことが必要であると捉えていた。第 4 段階では、子どもが内服によって受けたストレスを緩和するために、親から十分に誉められることが重要であり、親に子どもを誉めるようにすすめることも必要であると捉えていた。</p> <p>3. 総括 今回の研究では、幼児後期の子どもにおける内服のプリパレーションモデルを作成し、幼児後期の子どもに対し、内服のプリパレーションを行う際、どのような項目が必要であるかが明らかになった。今後、このモデルをどのように活用するのか、またこのモデルを使用し子どもの変化を明らかにしていくことが必要であると考える。</p>			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。